

神戸運輸監理部では、平成30年8月7日（火）に開催した、海事産業で働く女性の座談会に次ぐ「第二段」として、海事分野の公務職場で働く女性による座談会を、平成30年10月12日（金）に開催しました。

「男性の仕事」のイメージが強い海事産業において、女性の入職・定着が伸びむ中、公務職場においてもまだまだ女性は少ないことから、海事系公務職の女性職員の拡大を図るため、海事系公務職で働く女性の活躍を幅広く紹介し、女性に海事への関心を高めようと、今回は海事系の5官署5名の女性に集まっていただき、女性から見た職場の魅力や課題、仕事に対するやり甲斐などについて語り合ってもらいました。

進行役も神戸運輸監理部の女性（渋谷一穂総務係長）が務め、なごやかな雰囲気の中で進められました。

<参加者>

- 財務省神戸税関 監視部取締部門・監視官 小田 亜侑実
- 国土交通省近畿地方整備局 港湾空港部 品質確保室 技術評価係長 竹村 知子
- 国土交通省神戸運輸監理部 海上交通環境部 外国船舶監督官 大前 政恵
- 神戸海上保安部 管理課 総務係 中山 裕子
- 神戸市 みなと総局 みなと振興部 振興課 客船誘致担当係長 百田 弥生

最初に参加者お一人ずつから、現在の仕事の内容やこれまでの経歴について、自己紹介を兼ねてお話いただきました。

小田

神戸税関で神戸港の輸出入の取締りの第一線で働いています。密輸防止など、現場での活動は税関だけでなく、関係する機関と連携しながら進められますが、特に機動力や知識に優れた海上保安本部さんとはいつも良い仕事をさせて頂いています。

これまでに庶務関係や輸出入に関する審査、許可に係る業務などにも携わってきました。



竹村

近畿地方整備局で港湾工事にかかる技術審査などを行っています。技術審査は事業者選定にかかわる業務なので、いつも緊張感を持って業務にあたっています。

現在は主に神戸港の岸壁の耐震改良工事や浚渫工事などに携わっています。これまでに設計や計画、現場での工事監督などを行ってきました。



大前

神戸運輸監理部で外国船舶監督官として外国船に立ち入って、国際条約に基づいて書類のチェックや設備の検査などを行っています。一隻にかかる検査時間は3時間から4時間で、通常2人から3人が一組となって検査を行っています。

これまでに離島航路に対する補助金の交付に関する業務や、海技免状の交付に関する業務などに携わってきました。



中山

神戸海上保安部で海上保安官として活動しています。現在は陸上で総務関係の仕事をしていますが、3年前は巡視艇において乗組員の食事を作る業務や警備救難業務に携わっていました。派遣などで乗船した場合は航海時間も長く、時化の中、船酔いの状態で食事を作ったこともあり、大変なことも多く経験しました。



百田

神戸市みなと総局でクルーズ船の誘致を担当しています。

誘致活動では船会社に神戸港の魅力をPRし、神戸に来ていただくよう働きかけを行っています。また、受入れの対応では、施設の整備や多言語での案内、シャトルバスの手配など様々なおもてなしの業務を行っています。



次に、女性目線で見えた職場の魅力や仕事のやり甲斐についてお話ししていただきました。

百田

外国のお客様と積極的にコミュニケーションを取ることで英語が上達しました。

船のお客様だけではなく、クルーの方との親睦など、いろんな国の方々と接する機会はとても貴重だと感じています。また、誘致活動の結果、神戸に来る客船が増えることやり甲斐を感じます。

竹村

和歌山の事務所で監督官をしていたときに自分が設計した防波堤が、今回の台風の高波でも壊れなかったときは嬉しかったです。また、そうしたことを漁業関係者の方から褒められるとやり甲斐を感じます。

小田

出産後も働き続けられたことはとても自信になっています。

検査の対象が女性の場合には女性の税関職員が対応することとなるのですが、そんな現場の対応を指示されたときには「よし、やってやろう」という気になります。

中山

派遣では全国のいろんなところ（港）に行けるのが魅力です。船は皆が協力しないと動かさないのので、船の現場では一体感を感じることが出来ます。

最近では女性の配属も増えており、船には女性だけが使える居室や浴室なども整備されていて、女性でも安心して働ける環境が整っています。

大前

外国船舶監督官の業務の魅力は、外国人と直接関わるところです。

これまでに女性監督官だからといって監査を拒絶されたこともなく、仕事そのものは男女関係なく行える仕事です。

監査の現場で不適箇所を指摘したときに、船長から「欠陥を見つけてくれてありがとう」と言われることがあり、そうしたときには、この仕事の責任とやり甲斐を感じます。



次に、女性が仕事をするうえで困難と感じていることや、これまでに改善された事例などについてお話ししていただきました。

中山

船の設計段階から女性目線での意見が取り入れるようになっていて、シャワーの高さなど細かなところまで使いやすく整備されるなど、女性の意見を受け入れてくれる環境が整えられています。また、今年度から、制服を着用する海上保安部等の女性職員が制服に代えて着用できるマタニティ服が作られました。

百田

入港が早朝のときや、ナイトバスの運行が深夜に及ぶ場合など、体力的にハードなときもあります。船の荷役など、作業会社と交渉する場合などでは、女性のほうがスムーズに行く場合があり、仕事をしていて「女性ならではの」と感じることもあります。

大前

女性だからということではないですが、監査に行く船の中には衛生的に問題のある船もあり、女性でそのような環境が苦手な人にとっては厳しい場合もあるかもしれません。また、大型船などは歩く距離も長く、階段の上り下りもあるので体力は必要となります。

竹村

これまで工事現場にはトイレが一つしかなかったのに、私が監督官になると女性用のトイレを作ってくれたことがありました。最近では建設業も女性を増やす取り組みが進み、「快適トイレ」なるものが現場に設置されるようになりました。



小田

所属する部門は女性の配置の歴史が浅く、手探りの状態ですが、職場全体では以前から女性の配置はあって、先輩達のこれまでの取り組みや努力によって女性を自然に受け入れる職場風土が作られていると感じます。

このように、男社会というイメージがある海の職場ではありますが、実は、女性だからといった区別はなく、常に男性と同じように仕事をしていることや、女性がより働きやすくなるような環境整備が多くの公務職場で実施されていることが分かりました。

最後は、参加者から海事分野への入職を目指す女性に向けてメッセージを語ってもらいました。

百田

客船の船内は華やかで綺麗です。しかし、普段、滅多に見ることができないので、そうした現場にも女性がどんどん増えて欲しいと思います。

中山

海上の仕事は男の仕事のイメージだけれど、施設の改良が進み、女性でも安心して働ける環境が整っているので、女性にもどんどん入ってきてもらいたいです。

大前

海の仕事は体力のいる仕事もありますが、女性だからといって門戸が狭いわけではありません。海が好きで、興味のある人はどんどん志して欲しいです。

竹村

港を作る仕事で日本経済を支えているんだということを是非、実感して欲しいと思います。

小田

職場には産休明けで働いている女性が沢山いて、子育てをしながらも長く働ける環境が整っています。

それぞれ職種は異なるものの、海・港に関わる公務という共通点でいろいろな意見や考え方、悩みについて本音でお話しすることができました。

これからも皆さんの活躍を期待しています。

